



市民公開セミナー&秋季セミナーを開催

9月30日(土)、10月1日(日)の両日、美唄市に於いて、今年の標記を開催しました。

当日は、道同窓会より23人が参加したほか、本学よりは伊藤同窓会顧問、大橋同窓会顧問、木村同窓会副会長、数間副参与が来道してくれました。また地元の人たちを含めて参加者は50人でした。

今回の開催に当たっては、34期の高島さんが現地実行委員長として、準備段階から当日の進行に至るまでを見事に務めてくれました。加えて、高島ファミリーが両日、セミナーの下支えをしてくれたことも特筆されます。

初日は、「日社大市民公開セミナー」として開催し、村上道同窓会会長の挨拶で始まりました。挨拶の中で村上会長は、とりわけ社会福祉系他大学の方たち及び美唄市の関係者のご協力によりセミナー開催がされたことの意義を強調しました。

続いて、ご来賓として、平泉保健福祉部長にごあいさついただき、木村同窓会副会長も祝辞を述べました。

セミナーは大橋謙策先生の「地域のニーズに応えるソーシャルワークをめざして」の記念講演に移りました。氏は、20ページ近い資料を駆使しながら、地域福祉の理念とソーシャルワークの実践について、具体的にお話してくれました。

続いて、「空知のニーズに応えるソーシャルワーク」と題したシンポジウム。

ここでは、研究科40期の白井さん(札幌市社協)が「札幌市におけるソーシャルワーク実践を中心に」について、地元の越前谷市社協事務局長(北星大卒)が「社協における地域福祉実践計画策定と推進の取り組み」について、個人社会福祉士事務所を運営する安田さん(北星大卒、白沢ゼミ)が「独立型社会福祉士の立場からソーシャルワーク実践を考える」について、短い時間ながら明快かつコンパクトに、それぞれ報告をしてくれました。

3人の報告を受けて、大橋先生がまず論点整理をしてくださいました。こののち、会場からのご意見もいただいているうちに、予定していた3時間半は瞬く間に過ぎてゆき、結局17時までの長丁場セミナーとなったのでした。

最後に地元を代表して、山本さん（学部7期）が閉会の挨拶をしました。

ここよりは、「道同窓会秋季セミナー」となり、会場をピパの湯ゆーりん館に移して、懇親会が行われました。懇親会には、地元の越前谷さんと安田さんも参加してくれました。

まず、高島さんのギター演奏により、社大校歌を4番まで斉唱しました。いつもはCD利用であるため、今回はなかなか趣のある校歌ともなりました。

開会の挨拶と乾杯の音頭は、伊藤さんにお願ひし、20人以上の参加者は、途中のスピーチも含めて和やかなひとときを過ごしたのでした。

解散後は、同会場にて二次会が続行され、高島ファミリーも途中参加（高校生は飲酒はしていません！）し、宿泊者たちは夜が更けるのを気にすることもなく、またまた楽しい時間を送ったのでした。

翌10月1日は、秋季セミナー2日目として、先ずはラムサール条約登録湿地「宮島沼」を見学し、続いて、月形樺戸博物館（旧樺戸集治監本部）も見学、そして、月形藤の園を視察しました。

この後、市内の月形温泉にて昼食会が持たれ、各人の近況報告も含めたスピーチタイムがありました。また、大橋先生よりは、「道内の社会福祉系大学の連絡会をつくらう」との提案もあり、また村上会長よりは、「北海道の同窓会から、社大同窓会及び社大の活性化を図っていこう」との意気高い呼びかけがありました。

そして、「1月にまた札幌で会いましょう」（新春セミナー）と声を掛け合いながら、名残惜しくも2日間の全日程を終了したのでした。

今回の開催に当たり、現地の美唄の関係者のみなさんにはとりわけお世話になりました。心より感謝します。

社 大 校 歌（一部）

空の笛と 先立てて 都の乾 花照らう
丘も名ゆかし 代々木台 伝統の栄 我踏みて
呼ぶや思潮の 明けの声 社大 社大 おお われら

...

社会の福祉 他が任ず 忘我の愛と 智の灯
捧げん世紀 来たりけり

...

冷たき 熱き争いの 上なる平和 憧れて
行くは 民主の 道直ぐに 社大 社大 おお われら



3. これからの社大の課題

1) 人材不足時代での社会福祉の専門性と社大の役割

今日の深刻な人材不足は社会福祉のあり方を大きく変えようとしています。

まず、人材不足の背景には幾つかのことがあります。

その第一は、少子化による生産年齢人口の絶対的な減少であり、第二は、学生の社会福祉離れです。この10数年で、社会福祉の世界は「大変」（3Kイメージ）という負のイメージが、若者に定着しつつあります。

しかし、第三に、それにも拘わらず、高齢者、障がい者を中心として社会福祉対象者は増大し、社会福祉ニーズは高まるばかりです。

他方、2000年の「社会福祉基礎構造改革」による規制緩和が進められる中、社会福祉事業所はどんどんと拡大し、市場原理による競争市場の中で社会福祉法人の本来的役割（質の担保、専門性）が実質後退してしまいました。

こうした中で、社大が求められている役割とは、社会福祉の負のイメージの払拭と共生社会の中での社会福祉従事者の誇りが享受できるような新たな専門性の開拓にあるのではないのでしょうか。

さらに全国の社会福祉法人が本来の役割を取り戻せるようなリーダーの養成が何よりも必要となってきています。

2) 相模原やまゆり園の事件～人としての尊厳守る社会福祉へ

2016年7月26日、極めて悲惨な事件が起きてしまいました。殺害された19人と負傷した27人はほとんどが最重度の障がい者でした。

容疑者は「障がいの重い人は死んだ方がいい」という極度の差別感情を剥き出しにして犯行に走りました。容疑者は元職員であり、そうしたヘイトクライム（憎悪にもとづく犯罪）に至る背景には、「保護者の疲れ切った表情、職員の生気の欠けた瞳」を見て、「障がい者は不幸を造ることしかできない」といったものがあったようです。こうして、容疑者の偏見と差別の思考は、大麻常習犯としての影響も含めてどんどん歪んでいったのでした。

障害者差別解消法が成立したにも拘わらず、こうした重度の障がい者を排除する思考が少なからず存在していることは、決して見逃すことはできません。グループホームを地域に設立するときには必ずといって良いほどに、地域住民の反対運動が沸き起こります。これらも、今回の事件と根っこは同じであると考えます。こうした住民意識の偏見と差別感情は、社会から隔絶された入所施設的环境、家族や職員自らが障がい者に注ぐまなざしなどが動機形成の背景にあるように

も思えてしまいます。

「誰でも生まれたときには笑顔に囲まれ、家族や周囲の大人からの愛情を浴びながら育ってきたはずである。それは障害がある人も同じだ。そうした豊かな人間関係や長い人生の経験から切り離され、閉鎖的な入所施設の中にいる重度障害者を否定的に見るのは容疑者だけではないのかもしれない。事件後、ネットでは容疑者の言葉に共感を示す意見が散見され、その中には入所施設の職員と思われる人の書き込みもある。」(毎日新聞論説から)

私たち社会福祉を学び、それを生涯の職業とする者にとって、この「社会的弱者」に対するヘイトスピーチの動きは決して軽視してはなりません。それは社会の健全な発展を壊すものであり、共生社会を逆行させるものでしかないのです。

社大の役割は明確です。こうした社会的な「弱者」に対する権利擁護の思想を徹底して学ぶこと、つまり「すべての人の命と尊厳を守ろう」、「多様性は社会の力だ」、「人はみな個性的な存在だ」、「誰も取り残されない社会を作ろう」、「共に生きるインクルーシブな社会を作ろう」など掲げた大学教育、そして、共生の社会を啓発リードできる人材を放出することだと思います。

社大がこれから福祉の大学教育を進めていく上で、このことを肝に銘じてもらいたいものです。またそれは、社会福祉現場で働く社大同窓生の共通の実践目標でもあるのです。

(今回で、木村さんの随想は終了しました。ご愛読ありがとうございます)



新春セミナーは、1月20日(土)を予定

ということで、新春セミナーは標記の日にて札幌市に於いて会場設定を行います。

道同窓会はこれまで、社大同窓会に対して、「同窓会の活性化」提案を3回に亘り行ってきました。それは、同窓会と大学本体の双方向の努力により、高校生→入学→在学→現場実習→就職→卒業→社会福祉現場での労働、を一連の流れとして積極的に支援していこうというものです。

道同窓会自体の活動も、村上会長になってから、①学習を大きな柱とし、②セミナー(新春及び秋季)開催のたびに、これまで参加していない卒業生への呼びかけと、③社会福祉系大学等卒業生への参加呼びかけを行ってきました。このたびはそれが功を奏して、これまでセミナーに参加しなかった卒業生等の複数出席を得ました。

道同窓会はこのように、内部の結束及び学習を強化すると同時に、社大の使命と伝統である社会福祉界の横の繋がりをも、今後さらに強めていきたいと考えてます。

1月20日の新春セミナーは、定期総会も兼ねていることから、上記についての論議を更に深めつつ、北海道と日本の社会福祉現場の活性化、現場でのソーシャルワーク機能の向上を図ってきたいと考えています。多くの同窓生の一層のご参加を期待しています!

